

# GOD WITH US

Part 10: EARLY LETTERS

Message 22 – Ephesians

The Gospel of Reconciliation

Ephesians 2&3

## 神はわれらと共に

パート 10：初期の手紙

第 22 メッセージ – エペソ人

和解の福音

エペソ人への手紙第 2、3 章

### はじめに

エペソ人への手紙第 1 章は、信じる者に働く神の優れた御力がいかに偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるようにという使徒パウロの祈りで閉じました (エペソ人 1:19-23)。「神の御力」とは、父なる神がキリストを死からよみがえらせ、あるべき権威の御座、つまり父の右腕の地位、すべての支配と権威、権力と主権、この世のあらゆる称号をはるかに超えた力と同じ御力です。キリストは、万物をその足の下に従わせ、彼を万物の上に頭として教会に与えられ、「キリストの体である教会の頭として、すべてを率いる…」ように任命されました。キリストの御力、権威、高尚な地位に重点を置く理由が 2 つあります。

1) 第 2 章でパウロは、私たち信者は、「2:6 キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さった」と教えています。キリストの高尚な立場が、今や私たちの立場であるからです。

2) 第 6 章で、パウロは信者たちに、すでにキリストが十字架で打ち負かされた天にいるもろもろの悪霊の力を打ち負かすために、「祈り」、「霊的な鎧」を身につけるようにと教えています。キリストの権威と御力も私たちのものです。エペソ人への手紙は、キリストの死、埋葬、復活、高揚において、信者がいかにキリストと一致しているかを強調しているからです。

エペソ人への手紙第 2 章で、パウロは一步さがって、私たちがいかに神の子とされたかを説明しています。パウロの手紙の中で最も明確な議論は、「和解の福音」の両面を説明し、先ず神との個人的な和解、次に他の人々との和解を強調しています。新約聖書によれば、神を愛し、隣人を愛するという 2 つの偉大な戒めは、切っても切れないものと見なされるべきです。

第 3 章でパウロは、この福音のために、異邦人の世界に伝道するためのメッセンジャーとして神がお選びになったことは大きな特権であったと語り、また、ユダヤ人と異邦人 (非ユダヤ人) の両方が今や「共同相続人であり、一つの体であり、

「キリスト・イエス」の約束の内に共に分かち合っている」ということを明らかにされた「奥義」を宣言することも大きな特権であると語っています。

パウロは、ユダヤ人と異邦人（非ユダヤ人）の両方が今や「共同相続人であり、信者が彼らに対する「人知をはるかに超えた」キリストの愛の深さを知ることができるようにという第二の祈りで締めくくります。

### 神との和解：2：1-10

-神の御前の私たちの過去の状態。

**2:1** さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、**2:2** かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いていたのである。**2:3** また、わたしたちもみな、かつては彼らの中において、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった。

（エペソ人2：1－3）

ここには、キリストの救いの御業とは別に、人間の状態についての重要で驚くべき真理が含まれています。罪の結果、私たちは霊的に死んだ状態にありました。これは、私たちが

「霊的」になること、または「善を行う」ことができないという意味ではありません。むしろ、私たちが神から切り離されており、神の霊による命を与える関係に欠いていることを意味します。「善と悪」を知るための良心は備わっていましたが、罪によって切り離されている状態にあっても、私たちは皆「神に似たものとして」造られているので、善を行う大きな能力を持っているからです。しかし私たちは、神との関係において、神を喜ばせるために生き、行動することができるように、神に赦され、新しくされ、神の御霊に宿っていただくことを可能にする神との霊的な繋がりを欠いています。さらに、本質的に（生まれながらにして）、私たちは神の怒りを受けるべき子です（つまり、神の裁きを受ける運命にあります）。神の怒りは、人間の罪、悪に対するはっきりとした態度です。この真実は非常に重要です。これは、十字架でのキリストの贖いの御業との出会い（キリストが罪の赦しを与えてくださった場所）が無ければ、罪に対する神の裁きの直面へと向かっていることを意味します。

乳幼児はすべて「神の子」であるというような考え方が広く信じられています。もしかしたら、あなたもそのように信じておられるかもしれませんが、神のみ言によると、それぞれがそれぞれの罪と救い主の必要性に気付くまで、乳幼児は「神のみ前に霊的に死んでおり、神の裁き（怒り）を受けるべき状態で生まれると教えています。これは厳しいように聞こ

えますが、私たちの聖三位一体の神は、信じる私たちが神のとてつもない愛、赦し、恵みに立ち、神に贖っていただいた子になることができるように、計り知れない愛によって、神はその御子にすべての裁きをもたらされました。（参照：聖書には、死んでしまった幼児は、神の恵みによって、神と共にいると見なされると保証されています。サムエル第二 12：22,23）

-キリストを通して生きるものとされた。

2:4 しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、2:5 罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし—あなたがたの救われたのは、恵みによるのである—2:6 キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。2:7 それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜った慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。（エペソ人 2：4－7）

この箇所は、神が主語です。神が私たちのためにしてくださったことは、すべて神の愛、あわれみ、恵み、優しさに基づいています。私たちは「死んでいる」ので、「自分を生きかえらせる」ことは不可能でした。このように神は、イエスの死、埋葬、復活を通して、キリストの救いの御業に「Yes」と応答する人々に新しい命をお与えになります。神の恵みの行い（値しない恵み）によって、私たちはキリストと共に生きる新し

いのちに生かされ、天の玉座の間でキリストと共に座し、永遠に神のご栄光の中でキリストと共に生きる運命にあります。

-神から新しいいのちの賜物を受け取るには。

2:8 あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。2:9 決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。2:10 わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。（エペソ人 2：8－10）

神の恵みが私たちの救いの源であるならば、信仰こそが神からの救いを受け取る手段です。救いは自力で得られるものではありません（行いの結果ではありません）。私たちが神の「作品」であるという事実は、神によって形作られ、再創造（新しく変えられている）されていることを意味します。「作品」という言葉はギリシャ語の「poiema」で、「芸術作品」を意味します。神によって生かされた者として、神が私たちの人生のために計画された善行を歩むために創造された神の「芸術作品」であるということです。救いは善行によってもたらされ

るではありません。しかし、救いは常に良い行いをもたらします。

神が先ずあなたの内に「善い行い」をあらかじめ準備してくださっていて、次に、この世であなたと共に達成されたいと願っておられる一連の「善い行い」を用意しておられることをご存知でしょうか？これは、あなたの人生におけるあらゆる状況において「なぜ」と疑問に思う必要がないことを意味します。神は、人や状況を用いてあなたを形作り、あなたと共に歩みながら、それらの良い働きをも共に成し遂げられます。神のために何をすべきかを「理解」する必要はありません。むしろ、あなたに内在される御霊と歩調を合わせて歩き、御霊があなたのために準備しておられるステップへと導いていただくことを許さなければなりません。神の御心を生き抜くとき、物事を理解することは重要ではありません。イエス様との繋がりを保つことが重要です。イエス様が次の様に言われました：「．．． 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人につながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。」（ヨハネ 15：1-5）。神との交わりを育むことによって、神との日々の関係を強く保ちましょう。そのとき先ず、神をより深く知るために神に引き寄せていただき、あなたの内側を変えていただくよう祈り続けまし

よう。その後で、神があなたのために前もって準備しておられるステップへと導いていただきましょう。

## 互いとの和解：2：11-22

「和解する」とは、「再び集う」という意味です。気にかけている誰かとの人間関係において、決裂や損傷が生じたとき、和解したいと切望します。同様に、神は私たちが神と和解することを切望しておられます。個人が真に神と和解したとき、他の人との壊れた関係も和解もできるはずです。パウロの時代、キリストへの信仰の結果として、ユダヤ人と異邦人の中で起こっていた和解に重点を置いていました。ユダヤ人と異邦人は何世紀にもわたって敵対していたことを忘れないでください。彼らはお互いを憎み、民族間の関係は絶たれていました。

### - 異邦人全体としての過去の状態

2:11 だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であって、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々からは、無割礼の者と呼ばれており、2:12 またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であった。（エペソ人 2：11, 12）

異邦人全体として、以前、神がイスラエルの人々にお与えになった特別な契約関係の観点から、外国人として分離されていて、排除されていて、希望もなく、「神もいません」でした。異邦人は、神に「直接近づく」ことはできませんでした。キリストが来られる前に、「神と正しく」なりたいと願った異邦人は、「プロセライト」（ユダヤ教に改宗したもの）にならなければなりませんでした。神によってユダヤ人に与えられた契約の規定（モーセの律法）を受け入れ、従わなければなりませんでした。割礼の儀式を受け、ユダヤ人が日常生活で従っていたすべての法律に服従し始める必要がありました。異邦人が神と和解するためには、ユダヤ教の扉を通り抜けなければなりませんでした。しかしキリストは、異邦人全体の状況を劇的に変えられました。

-**今や、異邦人はキリストを通して神に近いものとなった。**

**2:13** ところが、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近いものとなったのである。**2:14** キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、**2:15** 数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、**2:16** 十字架によって、二つのものを一つのからだ

として神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。**2:17** それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。**2:18** というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中であって、父のみもとに近づくことができるからである。

(エペソ人2：13－18)

パウロの伝道全体の焦点は、彼らがイエス・キリストの人格と働きを通して、神に直接近づくようになったことを異邦人の世界に知らせることでした。もはや、神と和解するために「ユダヤ人」になる必要はありませんでした。彼らは信仰をもって直接イエスに立ち返り、「神の子」になることができました。（このことについては使徒15章に記録されているように、初のエルサレム会議において大論争となりました。神によってペテロを通して示されたこの真実、つまりユダヤ人になることなく、異邦人が直接神に近づくことができるという新しい現実を初代ユダヤ人クリスチャンが受け入れることは大変困難なことでした。ペテロでさえも、神がユダヤ人のために「汚れた」ものとされていた食物を「食べなさい」と言われたとき、戸惑いました。それから神は、ペテロが異邦人の家に行き、戸惑いは取り去られました。同じ救い主を信じ、共に交わりを持つことを体験するという重要なステップへと導かれました。- 使徒10章を参照。）

しかし、ここでのパウロの主張は、異邦人が神に直接近づくことが可能になったという現実よりも大きいのです。異邦人全体とユダヤ人全体が、それぞれの間の障壁が神によって取り除かれたということを知ってほしいと願っているのです。

「教会」（キリストの体）は「一つの新しい人類」であり、「一つの新しい体」なのです。したがって、キリストの十字架がそれぞれの敵意のすべての基盤を取り壊されたので、もはやお互いの間に敵意はないはずです。キリストの十字架は、二つのものを取り壊しました：

- 1) 人類を神から隔てた至聖所のカーテン（マタイ 27:51）。2) ユダヤ人と異邦人との間（または他の民族的に分割されたグループ間の）隔たりの壁を取り壊しました。
- 2) キリストの十字架は、私たちと神との和解とお互いの和解をもたらしました。

したがって教会では、あるグループが別のグループよりも優れているという位置づけがあってはなりません。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、すべての人々は一つの御霊によって父に近づくことができます。ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者は、二つの別々のグループではなく、神の御前に一つの新しいグループであるという新たな現実を生き抜く必要がありました。

アメリカでは、「日曜日の朝が依然として最も分離された時間である」というのは悲しい事実です。白人教会、黒人教会、スペイン人教会、韓国人教会、インド人教会、日本人教会等があります。「教会」における黒人と白人の関係という点において、その分離の原因は、主に白人の教会で黒人が白

人と同等の条件で一つになることが許されなかった時代へと遡ります。別々の部分に座ることを余儀なくされ、「完全に能動的な会員」になることができなかつたため、黒人は離れ、独自の教会を形成しました。1819年に、アフリカンメソジスト エピスコパル宗派は、リチャード・アレンによって形成され、アメリカで最初の正式な「黒人教会」となりました。過去200年間で、アフリカ系アメリカ人の教会は、拡大し、独自の多くの支部や宗派のを含んでいます。今日に至るまで、「黒人教会」は、アメリカの「白人教会」に対するキリスト教の本質的に別個の現れとして立っています。「黒人教会」と「白人教会」の観点から、状況の現実として完全に真実ですが、エペソ人第2、3章において、パウロが説いた「教会」の聖書の肖像の観点においては、まったく真実ではありません。これは教会が人種的和解を精力的に追求し続けなければならない理由の一つです。「和解の福音」は、日曜日の朝が「一週間の中で最も分離された時間」である限り、世には決して明確に映ることはありません。

- 一つの新しいコミュニティとして共に成長する

**2:19** そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。**2:20** またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身

が隅のかしら石である。2:21 このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、2:22 そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである。(エペソ人2:19-22)

古代の建造物は、正しい角度を設定するために重大な「礎石」が建てられた上で、強固な基盤を用いて建てられました。この例えは、「霊的な建物」、教会、つまり、イエス・キリストを礎石とし、使徒と預言者の教えを基礎とする生きた神殿を説明するために用いられます。建物の壁は「生ける石」(ペトロの手紙一2:4-7)、あらゆる部族、人種、国のキリストを信じた人々からできています。

では、私たちは何をすべきでしょうか？

- 1) 私たちは皆、神の家族の平等な一員であることを認識しなければなりません。
- 2) 私たちは皆、使徒と預言者の教えによる同じ基盤の上に築かれていることを認めなければなりません。
- 3) 私たちはキリストがこの新しい神殿である教会の主要な礎石であることを認めなければなりません。
- 4) 神の御霊と歩調を合わせて、互いに歩み寄ることを学びながら、共に成長することを許さなければなりません。

5) イエス様がその体である教会に与えられたこの「一つの新しい体」の原則に違反し続ける考えや慣行を手放さなければなりません。

イエス様が明らかにされたように、この原則は、世に対する私たちの証の重要な一部です(ヨハネ17:20-23)。教会は、和解の福音の両方、つまり、神との和解とお互いの和解を例証する必要があります。

### パウロの伝道の目的の要約：3:1-13

エペソ人第3章1節は、パウロが祈りを始めようとしている印象を与えます(3:14-21)。それでも、「異邦人」という言葉の言及によって、一時停止させ、神が与えてくださった贈り物の大きさ、つまり、キリストの良い知らせを異邦人の世界に伝えるために仕えるものとして神がお選びになたという寛大な賜物(パウロは、以前に信者を迫害する最も重要人物であったので、彼がその役割にふさわしくないことを常に認めた特権)について考えさせられました。パウロがこの偉大な特権について話すために脱線しながら、メッセージの中心性を指摘します：

**3:6** それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである。

(エペソ3:6)

私たちにとって、これは古い知らせのように思えるかもしれませんが、パウロの時代には、革命的な教えでした。特に、何世紀にもわたって自分たちを神の特別な契約の内であった民として「聖別された」と見なしていたユダヤ人にとってはなおさらです。

パウロは、エペソ人第3章10,11節で別の偉大な「奥義」を解き明かします。パウロは言いました：「神の永遠のご計画は、教会を通して、人類と神ご自身を和解させ、お互いを和解させるという神の豊かな知恵が、今、天にある支配と権威に対して示されるべきである。」（エペソ人3：10）。

パウロは善と悪の両方の天使の存在について言及していました。重要な点は、一つである教会は、人類だけでなく、天の存在に対する証でもあるということです。

この知恵ある説明の終わりに、パウロは異邦人の聴衆がパウロの投獄によって落胆したり悩んだりすることを望んでいないと言っています。パウロにとって、神のために異邦人の世界へ伝道するために仕えることは、この上ない特権であり、異邦人たちのために苦しむ必要がある場合はなおさらであることを知ってほしかったのです。しばしばパウロは、

「キリスト・イエスの囚人」であると自称しました（参照：エペソ3：1）。人間が企てて行う事柄のさらに向こう側を見て、自身を囚人として捉え、苦しむことをお許しになったより偉大な方を仰ぎ見ていました。

**3:12** この主キリストにあって、わたしたちは、彼に対する信仰によって、確信をもって大胆に神に近づくことができるのである。**3:13** だから、あなたがたのためにわたしが受けている患難を見て、落胆しないでいてもらいたい。わたしの患難は、あなたがたの光栄なのである。（エペソ人3：12, 13）

人生の多くの部分は「奥義」であり、より深いレベルで何が起こっているのかを理解するには、知恵と洞察が必要です。特定の奥義については、神について、神のなさる方法や私たちの生活の「なぜ」という疑問について決して理解できない奥義ではありません。それでもパウロは、私たちが神と神の愛をもっと深く知るようにと勧めています。そうすることによって神を信頼し、神の愛と善良さを疑うことなく神と共に歩むことができるためです。もしかしたら奥義が明らかにされるかもしれませんが、されないかもしれません。ヘブル人への手紙第11章は、苦しみながらも忠実であり、人生における神の目的を果たした人々のことを簡単な要約で思い出させます。彼らは、神が事前に準備されていた善い行いに歩み、後の章をどのように生きることができるとは知らされていませんでしたが、神の定められた物語の内に生きました。私たちの責任は、神の壮大な目的を果たしていることを知り、「奥義」に満ちておられる神に信頼することです。神の私たちへの愛についての知識を深めれば深めるほど、「奥義」において、神に信頼することができるようになります。



神の愛を深く知ることができるように

というパウロの祈り：3：14-19

**3:14** こういうわけで、わたしはひざをかがめて、**3:15** 天上にあり地上にあって「父」と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。**3:16** どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、**3:17** また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、**3:18** すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、**3:19** また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているものすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。

(エペソ人3：14－19)

この祈りについての2つの観察：

1) パウロは、キリスト・イエスがすでに彼らの心の内に聖霊様として住んでおられることを知っていたにもかかわらず、なぜ聖霊が彼らに「信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、」強めてくださるようにと祈ったのでしょうか？

ここでの「住む」という言葉には、「家に落ち着つく」という意味を含んでいます。キリストが彼らの心の中に完全に

落ち着かれ、玉座に着かれることができるようにとパウロは祈っています。イエス様は私たちが霊的に再生した瞬間からすべての信者の「心に住んでおられます」。それでも、信者が心の中でイエスの主権に服従する程度は異なります。パウロは信者たちに、御霊によって本質的に人生の主であり王であるイエス様に、完全に服従する力を与えていただくように祈っています。

2) パウロは続けて、彼らが理解できない神の愛を完全に理解するための力が与えられるように祈ります。さらに、神のあらゆる完全さの尺度に満たされ、彼らに対する神の愛の完全な深さを理解する力が与えられるように祈ります。これがクリスチャン生活の本質であり、神の愛です。パウロは、神への恐れと神の律法を強調する宗教制度の中で育ちました。私たちは常に「業績体制」にあり、神の喜びを勝ち取ろうとしているので、通常この種の宗教的環境は、私たちが神の愛を理解することを妨げます。しかしパウロは、神の喜びを勝ち取るために十分なことを成し遂げることは不可能であることに気づきました。その代わりに、神の愛は、まるで過去、現在、未来の失敗を覆いつくす、計り知れない大海のようでした。パウロが神の愛を浴びることを学んだのは、まさにこの計り知れない神の愛とあわれみの大海でした。パウロは、エペソと小アジアのすべての信者たちが、同じ場所に集い、神

の驚くべき愛の内に住み、楽しむことができるように祈りました。

今日、神の愛に生き、憩いを楽しんでおられるでしょうか？それとも、恐れと「実績体制」で生きておられるでしょうか？神は、私たちが神の裁き、基準、不快によってではなく、愛によって動機づけられることを望んでおられます。神の愛に生き、憩うことを学ぶことは、「実績を重視する環境」で育った私たちの多くにとって大きなパラダイムシフトです。あなたは神をより深く楽しむことができるように、また神の愛をより深く理解することを助けるように神に頼むことができますか？

### パウロの大いなる賛美の祈り：3：20,21

**3:20** どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかたに、**3:21** 教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくあるように、**アメン。**（エペソ人3：21，21）

パウロは、エペソ人への手紙の最初の3章の驚くべき真理をそれぞれの信者の内に生きる神の計り知れない力、つまりエペソとローマ世界の神々の力をはるかに超える力に焦点を当てて、大きな賛美の祈りで締めくくります。教会により、

またキリスト・イエスにより、すべての栄光が神にありますように。

次の3つの章でパウロは、エペソの信徒たち（そして私たち）に、神がしてくださったあらゆる御業による御光の内に、私たちの大きな特権にふさわしい生活を送り、それによって、キリストの光を互いにもたらすために、また、私たちが観ている世にもたらすように促します。

### ディスカッションの質問

1. 神との和解（2：1-10）。ここで新しい事柄、特に重要な事柄として突出した教えがありましたか？
2. 他の人たちとの和解（2：11-22）。この部分の学びがあなたの生活の中でどのように適用されていると思いますか？教会家族の一員としての生活においてはいかがでしょうか？この原則が具体化されていないところはどこだと思いますか？
3. パウロの祈り（3：14-21）。私たちにとって、神の驚くべき、計り知れない愛についての理解を深めることがなぜ重要なのでしょうか。神の愛をどのように把握してこられましたか？逆に、神の愛を理解するのに困難であったところはどこですか？